

---

**俺の      のあほ毛が      !!**

がらんどろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の　　のあほ毛が　　！！

### 【Nコード】

N5929Y

### 【作者名】

がらんどろ

### 【あらすじ】

女の子のどこに可愛さを求めても、それは男の自由であるしロマンだよな。そう、だから俺が女の子のあほ毛が大好きなのも何の問題もないただのロマンだ！いいや浪漫だ！

だけど幼馴染と妹のあほ毛に囲まれた俺の素晴らしき学園ライフはある日唐突に崩れ去った。俺は戦わなければならない。愛しいあの娘のあほ毛を守るためにもっ！オールジャンルあほ毛ノベル連載開始ッ！

## 開幕、妹の場合

彼の目の前で可愛らしくふわふわ揺れているモノがある。

教壇に立って教科書の英文を必死に黒板に書き写している女教師の  
声は彼の耳に入らない。

勤勉で優秀な友人のノートのおかげで、春休み明け恒例の前学年の  
復習がメインの授業はバツチリだ。

だから彼、きよすみてるや清澄輝也の興味は目の前で景気よく揺れている幼なじみ  
の頭の上のふわふわに注がれていた。

輝也は思う。女性向け雑誌ではゆるふわとかそういうのが可愛いと  
いうことになっているし、このふわふわ加減を担当せねば目の前の  
女子に失礼だろう、と。

前の席の幼馴染は危なっかしくて常に頭がフラフラ揺れているよう  
な頭の中もゆるふわ系の天然娘なのだが、今日はいつもの横ノリの  
リズムではなく前後の縦ノリだ。

そろそろだな、と見切りをつけてそーっとブラウスの襟に手を伸ば  
す。

少女の縦ユレがヘッドバンキングのように勢い良く前に傾いた瞬間、  
少年は襟を掴んで自分の方に思い切り引き寄せた。

「ふぐつ!?!」

喉がつまってカエルのような声を出した少女にクラス中の視線が集  
中する中、少年は手を離してマジメに板書を始める。

涙目になりながらキョロキョロと左右を見回した少女はいきなりに  
席を立て振り返って叫んだ。

「テルくんやさしくしてくれなきゃだー!ー!ー!」

「授業中だ寝ぼけるな!ー!ー!っ!ー!」

ああ、なんで起こしてやったのに俺まで注目を浴びねばならんのか。  
少年は想う。

俺はただ、大好きなあほ毛が揺れる様を眺めていただけなのに。  
少女ががむしゃらに振った裏拳が少年の頬に直撃した。

授業終了のチャイムが鳴る。

私立白河学園二年梅組では漫才夫婦の恒例行事に特段の反応は生まれず、終礼の挨拶を済ませるとクラスメートは席を移動して昼食の準備を始める。

「相変わらずキヨは松平まつひらさんに敵しいねえ」

「いやいや、愛の成せるワザですよ」

北校舎の食堂へ向かう男子達がすれ違いざまに茶化していく。

昨年からクラスの同じ者からすれば今更取り合わなければ良いの  
と思うものの、新学年で新しく顔を合わせた同級生にはやはりまだ  
目新しいネタだ。

輝也は律儀に暴力で反論しようと手元の辞書を振り上げる。

（今ならまだ最後尾の高等部が狙える！）

肩を痛めないようにスリークォーター気味に振りかぶられた腕を遮  
つたのは彼の友人の狭山さやま晃仁あきひとだ。

「テル、その辞書は僕んだろ。やるなら自分ののでやってくれ」

奪いとった辞書を机の横に引っ掛けたカバンの中にしまい込み、輝  
也の隣の机を動かして横付けするようにくつつけた。

「あーちゃんも、いじけてないでご飯食べよう?」

涙目で突っ伏したまま机を動かさないのは輝也の乱暴な覚醒技法で

起こされた少女だ。

右手で器用に筆箱の中からペンと小さなレターを取り出すと、丸っこい字で

『ノドがイタくてはなせません 松平愛菜』

と署名付きの手紙を晃仁に差し出した。

だそうだけど？とそのまま横滑りに手紙を輝也に渡した彼は、何とかしると無言で押し付けて自分の弁当を開いている。

オーバーなりアクション付きでため息を付いて肩を落とした輝也は愛菜の頭に手を伸ばして、

「ほら、さつさと機嫌直して弁当食おうぜ」

気遣う手つきで二度三度と撫でた。あほ毛を。

「はぁ……テルくんはいつもそうだよねえ」

仕方がなさそうに、それでいて長い髪に隠れた耳を赤くしながら、愛菜も席を反転させてくつつける。

輝也の正面に愛菜が、右隣に晃仁が座る配置で、愛菜の左隣が妙にぽっかり空いている形になった。

どうせなら向い合った机に横から合わせれば三人が丁度座れるのにその形を取っているのは、もう一人食事に加わる者がいるからだ。はいはい俺がわるうござんしたとおざなりの謝罪を口にしながら、輝也は空席の机を愛菜の左隣に付ける。

折よく静かに教室のドアが空いて、空席の借主がやってきた。

「清澄の妹です。兄は居ますか？」

新学期が始まってから毎日繰り返される女子の黄色い声にうんざりしながら、輝也は妹の未来みきに向かって手を振った。

四人は幼馴染だ。

輝也、愛菜、晃仁の三人は昔から小中高大一貫校の白河学園で、マンガのようにずっと同じクラスになっていた。

輝也の二歳年下の妹である未来も交えて幼い頃から四人で行動している。

中等部用の校舎は教員や特別教室用の北校舎を挟んで反対側の西校舎なのだが、午後一の授業に余裕があ

るときは毎日東校舎まで来て四人で食事を取ることになっている。

輝也達は中間地点の北校舎にしないかと気遣ったのだが、陸上部の未来が

「私がこっちに来る方が、早いから良い」

と断るので、ほぼ毎日上級生の教室で昼食を摂っている。

家族さながらにおしゃべりをしながらの昼食だが、もっぱら高確率で話題に登るのは輝也の愛菜への扱いが乱暴な件についてだ。

大半は愛菜自身が未来を相手に兄の狼藉をチクるという構図で、それはその日も崩れることはなかった。

「ねえ聞いてよミキちゃん！テルくんったら今日は特にひどかったんだよ！」

「お兄ちゃん、乱暴は、だめ」

「おい未来、話を聞く前から俺が暴力をはたらいた疑いをかけるなんて、お兄ちゃん悲しいぞ」

「後ろから人の襟をグイッて引つ張るなんて暴力だよー！」

あほ毛をみよんみよん揺らしながら愛菜が反論する。晃仁はと言えば我関セズの姿勢を貫いて黙々と弁当を処理している。

愛菜の勢いが思ったよりも強くて半分自滅だろうと我慢していた輝也も、声のボリュームは上げずにさらに反論する。

「じゃあ何か、愛菜は先週みたいに机に向かって全力でヘッドバツ

ドを決めてデコにまたアザを作りたかったのか？」  
うぐっ、と声をつめて愛菜が箸を持っていない手で額を隠す。

前の週の金曜の午後の事だ。

いつもどおりに船を漕いでいた愛菜だったが、その日の睡眠という名の海は大荒れの時化だったらしい。

教師も呆れるほど堂々とグラングラン揺れていた愛菜は、英語教師が起こそうと声をかける直前に轟音と共に額を机に打ち付けた。あまりの見事さ（クリーンヒット）にそのままセルフ失神し、皆が果然とする中で輝也と晃仁が黙々と彼女を保健室まで運び、治療を施したのである。

「いやあ、あれは見事だったね。小学校の頃のセルフ鉛筆刺しを超えるイベントだった」

気絶していて知らないはずなのだが、あとから聞いたその後の状況を思い出して愛菜が涙目になる。

とはいえ本気で泣かせているわけではなく、感情が昂ぶると楽しくても悲しくてもすぐ目尻に涙が溢れる夕子なので、男二人は慌てない。

だから、そんな愛菜を慰めるのはいつも未来の役割で、いつものパターンだった。

よしよし、と優しく撫でる未来に愛菜が抱きつく。

「愛お姉ちゃんが悪くないよ。午後の授業で眠くなるのは、みんないっしょ。そして今日も見事な跳ね具合です。お兄ちゃんもきつとお姉ちゃんに見とれて止めるのが遅くなってたから、負けちゃ、だめだよ」

「うんうん、未来ちゃんもいつも通り優しくして良い跳ね具合だよ」

お互いのあほ毛を撫で付けて跳ね合わせる。

間の抜けた空間を完全に無視して晃仁は紙パックの牛乳を黙々と飲み続け、輝也はその光景に見とれている。

愛菜のあほ毛は完全天然モノで、未来はこの兄の高尚な趣味を受け継いで愛菜のあほ毛に惚れこみ、自分であほ毛をセットしているわけだが、

「うむ、二人とも今日も可愛いぞ」  
あほ毛が今日もキュートでグツドだ。

二人は一瞬動きを止めて、自分の弁当にかかりだした。

「はあ……………」

「我が兄ながら、救いようがないです」

「俺が悪いんかよ!？」

「……………テルの趣味はどうでも良いけど、次の体育は武道場で剣道だぞ」

言ったテルは既に弁当を包み終わって机を戻し始めている。

「げっ、おまつ」

時計を確認すると、昼休みは残り15分だ。普段の体育なら余裕で間に合うが、剣道の授業は防具を見につけて正座で待たないと怒られる。

必須授業で中学の頃から5年目の付き合いになる剣道部顧問の三枝勇次郎なげんは古典の非常勤講師兼地元剣道場の鬼師範だ。

文句を言う時間も無いと判断した輝也は目の前で「あたし達はゆっくり食べようね〜」と笑いあう二人を無視して弁当を掻きこむ。分針が動くまでに胃の中に昼飯を書き込んだ輝也は乱雑に弁当を包みながら立ち上がる。

「お兄ちゃん、片付けはやっておく。あと、これは忘れ物」



未来は弁当を入れてきた手提げから、剣道用の手ぬぐいを取り出して手渡す。

「サンキュ！」

頭が痛くないようにポンポンと叩き、竹刀と手ぬぐいを手に輝也は晃仁の後を追いかけた

白河学園は白河市内の双子山を切り開かれて作られている。

中等部と高等部は標高が高い（とはいえ、歩いて十分ほどでさほど高くないのだが）兄山の上に校舎とグラウンドがある。

西側の通用門をくぐると、西校舎、北校舎、東校舎とコの字型になるように校舎が立ち並び、東西校舎の更に外側にそれぞれの体育館が建設されている。

剣道や柔道のための武道館は高校生用の東校舎の南側に建っており、輝也や晃仁はその武道館の二階で一列になって正座していた。

チャイムの音が大音量で鳴る。剣道部所属のクラスメイトであるムサシ君が、チャイムよりも大きな声で叫ぶ。

「もーくもー黙禱！……！」

全員が背筋を伸ばして顎を引き、集中する。

三枝先生が毎期の初めに行う説教の内容を思い返す。

「剣道が学校の必須科目になっているかどうかは私にも君たちにも関係ない。決して暴力として使うことはなく、暴力に対抗するために剣道を学ぶ事。真面目に、集中して、怪我をせぬように体を使う事。よいな？」

ゆっくりと思い返し、心のなかで反芻を終える頃にムサシ君の号令がかかる。

「止めッッ!.....礼ッ!」

「よろしくお願ひします」

全員が揃って礼をする。

正面に齡60を超えているとは思えないほどピシッとした正座でこちらを見ている三枝先生が穏やかな声で今日の授業内容を告げる。

「本日は突きの練習をしてもらう。後半はいつも通り好きなペアで試合形式だが、今日は突きのみ有効という条件で試合う事」

三枝はムサシに声をかけると立ち上がり、全員に見本をみせた。

初めッ!という号令で全員が道場の全体に散る。

「やるか」

「おうっ」

輝也はいつも通り、晃仁とペアを組んで道場の定位置へと移動した。

三枝は学校の授業らしくない自由な進め方をする。

「剣道の腕前ややる気に個人差があるのは当然だ。私の道場なら平等に扱うが、君たちは自分が気持ちよく剣道を習える相手を自分で決めて練習すればよい」

おかげで実力差のある相手にバシバシ叩かれることも無く、輝也はいつも通り晃仁と竹刀を向け合っていた。

「それにしても、今日のアレは本当にどうにもならなかったのか?」  
中段で構えて竹刀の先を払い合っているところに、唐突に質問が投げ入れられる。

動きが止まった一瞬に喉元に伸びてくる竹刀を払って半歩下がる。  
元通りの距離に戻ってから深呼吸して竹刀を構え直す。

「だって仕方ないだろー。あいつ、成長と共に寝相の悪さも成長してるよな。悪い方に」「否定できない選択肢を呼びかけるな」  
面の格子の向こう側で晃仁が顔をしかめる。  
隙を突いた竹刀は首を振って避けられた。

「でもあーちゃんだって女の子なんだからさ、そろそろ優しくしてあげるべきなんじゃないの」

「今でも十分手助けしてると思うんだけどなー。あいつの天然をフオローするために俺らが今までどれだけかけずり回ってきたか、忘れたんかよ?」

「いやいや、楽しかったからね、忘れないよ。僕としてはそこまで女性の髪型にしか興味を示さない不憫な君を育てたくてね」

輝也が反射で叫ぶ。

「はあ!? あほ毛の何が悪いんだよ、ぶっ飛ばすぞ!?!」  
「ばっ、という小さく鋭い晃仁の注意も時既に時間切れだった。

いつの間にか輝也の後ろに立っていた三枝がガツシリと抑えこむように肩をつかむ。

「……どれ、お前達は余力があるようだ。私が直々に稽古をつけてやろう。二人まとめてな」

「……よろしくお願ひします!?!」  
お互いを罵り合う余裕もなく二人は三枝の突きで吹き飛ばされ続けることとなった。

「あゝあゝ。厄日だ」

結局三枝には数えられないくらいの突きを食らい、二人は最後の試合形式を免除されるくらいズタボロにされた。

授業後に保健室に連れていかれて喉元に湿布を貼られたが、風呂に入った時に鏡を見たら酷い事になっていた。

とはいえ、ムサシ君曰く

「相手が三枝先生で良かったね。突きは面の垂れに当てるのが難しいから、素人がはずすと首の横を竹刀の先が擦って抜けていくんだよ。白熱して盛り上がってる人たちもいたけれど、後になって大分後悔すると思うよ」

とのことだ。実直だが優しいわけではないというか、さすがは三枝道場の門下生でもある剣道部の主将だった。

「……今日はもう寝るか」

明日の予習はしていないが、晃仁大先生に頭を下げるとしよう。

必要な教材を鞆に放り込んで、電気を消して目測でベッドにダイブする。

(はぁ……今日も良いあほ毛が見れた。愛菜のあほ毛はホント芸術モノだよな。何度撫でて戻ってくるし)

我が妹は明日もアレを見習って朝早くから髪をセットするんだろうな！。

がんばれよー。

「お兄ちゃんっ！！」

輝也がウトウトし始めていた所に、ドアを蹴破るようにして未来が部屋に侵入する。

「あー、ビックリしたぞー、なんか用なんかよー」

「……ちゃったの」

うつぶせになって枕に顔が突っ込んでいるからだろうか、よく聞こえない。

「ごめん、聞こえなかった」

体を反転させて、妹のほうを向く。廊下の明かりがまぶしくて良く

見えないが音はよく聞こえるようになった。

「だから、とれちゃったの」

「何が取れたって？何か壊れたんか？」

「違うの。……あほ毛が、とれちゃったの」

「なっ!？」

ベッドのスプリングを最大限に活かして足元に立っていた妹に飛びかかるようにして頭の上を確認する。

「な、無い……!」

頭を洗ったから均ならされているだけかとも思ったが、よくよく見ると切り落としたようにスツパリと、だが不思議と断面が揃ったまま、いつもあほ毛が立っている部分だけが取れていた。

未来がおずおずと差し出した両手の中にはなぜか取り外されたあほ毛がバラけることなくきつちりと鎮座しておられた。

何故だろう。こんなにも悲しい気持ちになったことがかつて有っただろうか。

涙が溢れてきた。

「み、未来イイイーっ!」

「わかってた反応だけど、お兄ちゃんちょっとキモいよ」  
涙が溢れてきた。

もし俺が日記なんぞをつけていたら、きっとその日のページにはこう記しただろう。

『今日は人生で最悪の日だ』

だけど、俺のことだからきつとあとからそのページに一言付け足すに違いない。

『そして、人生で最良の日々の始まりだった』  
と。

## 見参！ 妹を狙う女騎士

未来みきに起こった異変は一目瞭然だった。

いつも通りの待ち合わせ場所でミキの頭部と顔を何度か見比べた愛菜は、

「ミキちゃん！どどどーしたのっ！？お姉ちゃんの事キライになっちゃやだーっ！」

「頭のピヨン（あほ毛）は取れちゃっただけだから、愛お姉ちゃんは大好きだよ」

二歳年下の女の子と頭を撫で合う光景も、今日の輝也には興奮度半減だった。

理由はもちろん、在るべき物が存在しないからだ。

輝也がどうしたもんかなーと後ろで苦笑していると、晃仁が肩を組みながら小声で話しかける。

「なあ、アレ、どういう事なのか分かるか？」

「分かるか。洗ってもワックスで抑えつけても、取れて残ってる方の部分はあの通りしつかりと立ち上がっちゃうんだよ。取れたほう共々、バラけることがもない」

は？と晃仁が口を開ける。お前はイケメン顔だからあんまりアホ面しないほうがいいぞと思いつつもバカバカしいのであえて注意はしない。

「バラけないって、髪だろ？切ったら一本一本はらら〜と散るもんじゃないか」

「それがアニメの絵柄みたいに、一個のアクセサリみたいになっただよ」

ミキーと輝也が呼ぶと、愛菜と手をつないだまま未来が寄ってくる。晃仁を指さすと無言で頷いて、通学カバンの中から取れたあほ毛を

取り出す。

「本当だ、なんだこれ、何かで固めたみたいになってる」

「だろ、ちなみにハサミをいれても切れないんだぜ」

晃仁は「なるほど」と呟きながら何度か触って硬度を確認したあと、ありがとうと未来に髪を返す。

輝也の言葉に過敏に反応したのはむしろ愛菜だった。

「えええっ！？髪をハサミで切ろうとしたの！？ダメだよっ！」

「いや、生えてる髪を切るんじゃないかって、こっちの取れた方だぞ」

「それでもそれはなんかダメなのーっ！」

はいはい、と頭を撫でて落ち着かせながら、妹に向き直ってそうなのかと問う。

「ん。ちよつと、『もぞつ』ていうか、『ぞわわっ』みたいな感じは、したよ」

「そっか、ごめんなー」

妹には素直に謝る輝也に愛菜が肩を落とす。

いつも通り、輪の一番外から全員をしつかりと見ている晃仁が時計を全員の中央に差し出しながら言った。

「何か良く分からないけど、ともかく髪の毛だからね。時間が解決してくれるよ。それよりもまず時間が解決してくれない方をなんとかしないか」

全員が学校までの時間を逆算し、汗をかく。

「ではお兄ちゃん、私は朝の自主練をするので  
未来を先頭に全員が駆け出す

「おい待て妹よ卑怯だぞ！」

「しゃべる位なら走った方がいいぞ、テル」

「み、みんなおいてっちゃんだよ〜」

騒がしい四人が走り去った後の住宅街には閑静だけが残った。そしてその静けさの中に溶け込み、彼らを観察していた影が、ゆっくりと彼らの後を追う。

「見ツケタ」

浅く、嬉しそうに笑みを浮かべながら、ゆっくりと、しかし確実に忍び寄るようにそれは進んでいた。

前日と同じように昼休みになって2年梅組を訪れた未来を見て、3人は腰を上げた。

「ミキ、今日は屋上に行こう」

「……なんで？」

「良いから、今日は上で食べるんだ！」

輝也が妹の背中を押して階段を先にながっていく。後ろから歩く二人は、

「素直に言えば良いのにね」

「ま、テルらしくて良いんじゃないか」

と苦笑するばかりだ。

白河学園の校舎は屋上に上げられるようになっていく。

もちろん安全には気を使われていて、テニスコートのように周囲は金網で囲まれているし、天井部分にもネットが張られている。金網の外にはそれ以前に設置されていた手すりがあり、避難用の道具なども設置されたままだ。金網の外に出る箇所には南京錠がかけられているので生徒からすると設置位置が甚だ疑問ではるのだが。

ともあれ、そのような安全な空間にテーブルが用意されているため、



昼どきには混み合つのが常なのだが、さすがにまだ肌寒い春先だけに人は少なかつた。

「よっし、んじゃ食うか！」

「……ありがとう、お兄ちゃん」

未来の小さな声に輝也は黙って頭を撫でながら空いた片手で弁当を開いた。

多少気恥ずかしいくらいの子のバレバレの気遣いも、小さな頃から仲のいい関係を保ってきた四人にとっては日常茶飯事だ。幼い頃からの関係など、ある程度の恥ずかしさを受け入れながらでなければやっていけない。

全員がいただきます、と声を上げる頃には未来の顔にも自然な笑顔が戻っていた。

「んー、全然伸びないねえ」

小さな弁当の中をさらっと食べ終わった愛菜は、同じく食事を終えた未来の髪を梳くようにして撫でる。

ちなみに未来の弁当は運動部相応に通常サイズなのだが、兄と一緒に行動しているからか女子の中では早食い気味だ。

高校生らしいデカイ弁当箱の中身を飲み込むように放り込む輝也はジト目で愛菜を見やり、代わりに晃仁が指摘する。

「そりゃあさすがに一晩じゃ伸びてもミリだよ、元通りになるのは夏くらいかな？」

「多分、そのくらい」

「もったいないなあ、せつかく可愛かつたのに」

「だふおな！はわいはっはほあー！」

「お兄ちゃん、キタナイよ」

「テルくんが言ってるのはミキちゃんの一部だけでしょー！ほんっ

と昔から変わらないんだから！」  
髪が早く伸びるように後ろだけでも縛るねー、と愛菜はどこから取り出したのかヘアゴムでセミロングのミキの髪をポニーテール気味にまとめあげはじめる。

お茶をすすりながら晃仁が視線を逸らして感慨深くつぶやく。

「ああ、確かにテルは一部だけしかみないで爆弾発言を繰り返すよなあ。中学の時の図書室で男子談合を引き起こしたの覚えてるか？」

「あー、ありや若かったなあー。竹組の誰かがあほ毛にイチャもんつけてペタ髪ロングヘアーが最高とか抜かすから口論になったよな。最終的にペタつながりで胸部の巨貧についての哲学的な論争に発展して図書委員まで一緒に盛り上がって収拾つかなくなったっけ。口リコンでロングヘアーが好きなのがバレてしまったフナコシ君は今何をしているのか」

「彼は進学校に行くという名目で転校していったぞ。……女子からの冷たい視線に耐えられ無くなったことも一役買っていたほうに、僕は賭けるけど」

「俺もそつちだ。成立しねえな」  
女子二人が懸命に無視して、二人でポニーテールの出来栄えについてはしゃぐ。

こうやって下らない話をして、いつも通りになればいい。

皆がそう思っていたけれど、その程度の思い出すら許されることは無かった。

ふと顔を上げた愛菜が聞く。

「あれ、ねえアキくん、今何時？」

「20分だからまだ昼休みは30分くらいあるけど」

「じゃあ……何で私たち以外の人が居なくなってるの？」

辺りを見回してみると、あれだけ賑わっていたはずの人たちが居なくなっていた。

「ほんとです」

「ちよつと肌寒いからね。僕達も戻ろうか」  
立ち上がる晃仁の袖を輝也が強く引いた。

「お前、あれが何か分かるか」

首をかしげながら輝也がアゴで指す方を見る。

そこには銀髪碧眼で鎧を見にまとった騎士が立っていた。

「いや、残念ながら寡聞にしてコスプレ以外の何者にも見えない」  
「奇遇だな、俺もだ……無視するぞ」

全員が輝也の声と同時に自然に視線を外して弁当を片付け始める。  
一番最初に輝也が立ち上がると、目の前に騎士が移動していた。

「ぬあつ、あぶねえな、ちけえよ！」

近くに来てようやく分かったが、それは女だった。どう見ても顔の作りが外人だ。白河学園にはコスプレ関係の部門もあるが、そもそもこんな目立つ外人の女はこの学園には居ない。

何か用か、と輝也が聞こうとしたその時、先に口を開いたのは女だった。

「私の名はシユラクムーンヴァリエ。月神を信仰する国家ムーンパレスの次代王女候補だ」

「は、はあ」

生返事を返す輝也と同時に四人全員が共通の認識を得た。

(こ、この人ホンモノの変態だー！っ！?)

まずい、と警鐘を鳴らした晃仁が二の句を告げない輝也の代わりに会話を続ける。

「その、シユラクさん？ 僕達に何か用でもあるのでしょうか？」  
シユラクと名乗った女性は首を一つ縦に振ると、未来を指さした。

「私が王位を継ぐためには、昨晚この少女から生まれ落ちた月の髪飾りを祖国に持ち帰る必要がある。悪いが、もらいうけるぞ」

状況に動けたのは輝也、次いで晃仁だ。未来は理解よりも早く逃げなければならぬという思いを得て、愛菜はただ呆然と見上げていた。

シユラクの手が腰の剣に落ちたところで、上から手を被せた輝也が肩から体当たりをし、床に押し倒した。

「逃げる！」

輝也が揉み合っている間に、晃仁が二人の手を引いて走りだす。

「わけわっかんねえこと言いやがって、月の髪飾りって何なんだよ！」

「今朝貴様らが見ていた物だ！」

言われて今朝の会話を思い出す。

その時に見ていたものと言えば、

「未来の、あほ毛？」

「その何とか毛と言うのは分からんが、髪飾りが魔力を持って生成されたのはその少女の頭部の台座からの魔力の反応で分かっている！」

輝也は舌打ちをしながらも、訳が分からない話の中の筋を見つける。ああ、そういう事かよ。つまりは俺のあほ毛をこいつは奪おうってんだな！

「ちなみに、お前が未来のあほ毛を奪って行ったらどうなる」

「月の髪飾りだ。台座を持つ物は月の国にその生命力を三日三晩送り続けて神への捧げ物になり、その後100年の国の支えになる」  
血の気が引いた。

細かい事は分からない。それでも会話のニュアンスからすれば、  
未来が生贄になって死ぬ”ってことだろう。”

だが、背後から駆け寄ってくる音に気を取られて輝也は力を緩めて

しまった。

「どけっ！」

「ぐえっ……」

片足で跳ね飛ばされ、なんとか足から着地した輝也だったが、シユラクの攻撃は更に続いた。

シユラクの剣が居合の様に迫ってくる。

とっさに剣道の授業を思い出した。

（居合は振り払う方向に逃げちゃダメだ！）

剣道のすり足で、体を一步右後へ。シユラクから見た際には左奥に逃げられたことになり、居合では十分に届かない。

だが、それでも彼女は止まらなかった。

「しっ！」

ギリギリの距離で躲けたはずなのに、思わずガードしようとして上げた腕に剣がかすっていく。

その程度でもチリツとした痛みが腕を走った。

（真剣とか、コスプレにしてもやり過ぎだろう！？）

思わず腕を確認するとシャツが裂け、肌からは浅く血が流れている。

その時、背後から声が飛ぶ。

「やめて！」

普段物静かな妹の叫び声に輝也は思わず振り向いた。

視界に映るのは走り寄ってくる妹と、彼女が三日月型のソレを全力で投げつける光景だ。

「こんなの為に、お兄ちゃんを傷つけないでっ！！」

言って投げ、フリスビーの様に高速で回転しながらあほ毛が飛ぶ。

シユラクは剣を持たぬ手を伸ばしたが、髪飾りは宙で止まった。

「ざけんじゃねえぞコスプレ女！これは俺んだ！未来も俺んだ！てめえみてえな変質者にゃあ髪の毛一本触れさしやねえぞ！！」

叫ぶ輝也が血を流している右手であほ毛を握り締めていた。

「変質者……私がか？」

やや呆然としたシユラクが剣を構えずに言う。

「さっきの話しぶりからすりゃあ、アンタは俺達を朝から追っかけて来てたんだろう、それを立派なストーカーって言うんだよ！」

「す、すとーかあ？ な、なんだそれは！」

答えてやれ愛菜、といきなり輝也が話を振る。

「わ、私がつ！？」

「頼むぜ」

んーと頭を回転させる。

ストーカーの細かい定義も法律で裁かれるストーカーの罪の重さも自分には良く分からない。

だから彼女の中のストーカーと言えば、

「例えば物陰から人の事をこっそり観察したり、気付かれないように追いかけてその人の事を隠れて知ろうとしたり、その人の家に忍び込んで物を盗んだり、激しい人になるといきなり相手に告白しちやったり」

「つまりアンタは今そのストーカーと同じなんだよ！王女様の役なのかなんなのか知らないけどな、アンタのすべき事は今すぐ山の麓の交番に言っておまわりさんにその両手を差し出す事だ！」

「ま、待て！」

輝也の勢いだけの発言をシユラクの声が止める。

「わ、私は王女だぞ！そのような、その、気持ち悪い事をしようというつもりは全くない！月神信仰は月が出ている元での争いや悪を厳しく取り締まっているが、例え月が出ていなくともそのような非道な行いを肯定はしない！私は純粋に女王になるために……」

「さっきのあーちゃんの説明、ストーカーからしたら全部『相手を想う』純粋な想いが原因なんだよね」

いつの間にか南京錠を開け、金網の外に移動していた晃仁が外べりに設けられた手すりから下を覗き込みながら告げる。

「君の頭の中でどうなってるかは分からないけれど、日本で純粋な

想いとやらが法律の外で許される事はないんだ、諦めたらどうかな？」

「そんなわけにはいくか！大体何をそんなに大事に捉えているのだ、台座の生命力を借りるだけなんだぞ？」

「……話にならないね。行けっ、テル！」

「おうっ！」

晃仁が手すりの外に備え付けられた箱を蹴り飛ばす。

衝撃を与えられて飛び出た物体は重力に引かれて伸びていく。

引き伸ばされた骨組みが自動で噛み合い組み立てられ、先端は斜めになりながら最終的に地面に突き刺さる。

「それは一体なんだっ！？」

女騎士が気を取られている隙に、輝也は未来を抱えて避難用のシュートホースに飛び込んだ。

避難訓練でしか利用したことがないが、災害時に利用する道具だ。

普通は体の小さな子供しか使えないが、大学部の生徒が改造・試験した結果設置された高等部向けのそれは、狭いホースの中で体をこすりながら減速しつつ、すべり台の要領で地面にたどり着く。

一気に滑り降りた輝也は未来を地面におろして

「走れるな！？」

「……ごめんなさい」

「そういうのは後で聞くから、大学の敷地に行くぞ！」

携帯電話を取り出して知人へ連絡しながら、二人は走り始めた。

## 軍師推参！

「で、貸してやるのは良いんだけど、ちゃんとお前もこつちを手伝えよな」

白河学園は大学部だけが双子山のうち、標高の低い弟山に建設されている。

そんな大学部の敷地の最大の特徴は、山を抜けて周囲の市を結ぶ高速道と接している点だ。

資材搬入用のトラックなども頻繁に出入りするため、出入口のエリアには巨大な駐車場が設けられている。

駐車場の一角で、輝也は携帯で呼び出した相手からサイドカー付きのバイクを借りていた。

ラグビーかプロレスの選手のように鍛えられた肉体が、油污れなどで黒ずんだツナギを内から圧迫している。

男の名前は那波多目力哉<sup>なばためりきや</sup>。

白河学園大学の歩く危険物である。

「ありがとうございます、リキ先輩。来週の部活紹介はきっちりと参加しますよ」

輝也はリキが高校時代に設立したカスタマイジングエンジニア部、略してCE部の部員だ。リキは大学部でも同名のサークルを運営しており、CE部の部員は大学でもリキの傘下に入る事は確実だと見られている。

「バイクは明日の朝、ここに置いておきますんで」

「おう、土曜だけど俺は来るからな、それでいい。あとガソリンは満タンな」

チラッと表示を確認する。

ガス給油の必要を示すランプは煌々と灯っていた。



「既にランプ点灯してんすけど」

「ガソリン、ま ん た ん、な？」

「……ラジャです」

まあバイクのガソリン満タンくらい渋りませんけどね。CE部の部員が増えて部費が増強されたら優良パーツをくすねて家のPCを改造してやるうと心に決める。

「ああ、あとこれを着て行け」

手渡されたのはあまり汚れていないツナギだった。

「洗った後に放置しておいた奴だが、この時間に学生服でバイク乗り回すのはマズイだろう。未来ちゃんの方はひざ掛けとかなんか適当に羽織って寒そうにしてりゃOKだ」

「へえ、気が利きますねりき先輩。サイドカーに彼女なんて乗せたことないでしょう？」

輝也が調子にのるとヘルメットの上からゲンコツを落とされた。

(へ、ヘルメット越しなのにイテエ……)

涙目になりながら、気を付けるよーと去っていく先輩にばれないように頭を下げ、ツナギを着込んだ輝也はバイクを走らせ始めた。

「未来、携帯で晃仁に連絡とってみてくれ」

「良いけど、なんで？」

右後ろを振り向いて後方を確認する。車の隙間を縫って高速道に入る。

とりあえずはこの先のガソリンスタンドに入って燃料を満タンにしてから、

「あのコスプレ野郎をなんとかするのにな、俺らの軍師の知恵を借りるのさ」

結局、家に戻ったのは夜になってからだ。

バイクでの逃走中、晃仁達との連絡はあっさりつついた。自分たち

が逃走した後には何らかの危害を加えられていたのではないかと心配していたし、騒ぎになっていけばあの女騎士、シユラクが捕まっていないかと期待していたのだが、そのどちらでもなかったらしい。輝也達を追ったシユラクだったがバイクで逃げた二人を見つければ当然出来ず、夜まで逃げきる事が出来たのだ。

「さて、改めて現状をマジメに確認すると……あのシユラクとかいうコスプレお姉さんは、未来ちゃんの取れたあほ毛を狙ってる。そしてそれを奪われたら未来ちゃんが危険だ。なるべく早く決着をつける必要がある」

場を仕切るのはいつも通り晃仁の役割だ。

4人が集まっているのは輝也の家のリビングで、両親が揃って映画を見て外食までして来るということから、危険な話にも気兼ねする必要はない。

輝也と晃仁は食卓テーブルの椅子に正面するように座り、愛菜と未来はソファーに寝転がっている。

「あのね、アキくん。一つ質問してもいいかな？」

愛菜が恐る恐る振り返りながら手を挙げる。

どうぞ、と促されて

「その解決って、警察とかに任せちゃだめなのかな。だってあの人が持ってた剣って、ホンモノなんだよ。危険なんだよ？」

真剣な顔で二人に訴える。

未来もうなずいてお姉ちゃんに同意、と意思を表明した。

輝也はどう説明したものかと悩む。

もちろん男子達もその方が良いのは分かっていた。

だけどその前に自分たちが彼女をどう判断するのが問題だ。

輝也は漠然と感じているだけだったが、警察に任せるには問題があるのだと晃仁の方は明確に理解していた。

「その前にあーちゃんに聞いてみたいんだけど、彼女は本物だった

と思う？それとも、コスプレだったと思う？」

予想外の質問だったのだろう。ふえっ！？と規制をあげて固まる愛菜は未来に向かってハイタッチをするように手を差し出すと、合わせられた未来の手をパーンと打って

「パス」

パスを宣言した。

微妙そうな顔で頷いた未来はあっさりと話し始めた。

「私は、本物だと思います。あの剣は本物でした。彼女の着ていた鎧もガシャガシャ鳴ってて重そうでした。どれも私の中では本物です」

『兄が真剣で斬られた』のだ。もはや未来の中に、これを冗談や妄想の類だと片付けられる余裕は無い。

だが、あまりにも怖すぎてこれがどれくらい怖い事なのか良く分かっていないとも未来は感じていた。

だけど自分一人じゃないこともすごく安心する、とも。

マンガや小説みたいにカツコウイイことの一つや二つくらい言いたいけれど、それは無理だ。

だから、頼りになる兄達に任せようと思った。

「俺も未来と同じ意見だ。あれはコスプレじゃねえ。だけど、アイツの出所を考えたってしょうがねえだろ」

だろ、とこっちを見て自信満々に親指を上突き出すサインをしてくるお兄ちゃんに、私も笑ってサインを返す。

「なんで考えてもしょうがないの？」

「あ？いや、それは……晃仁がまとめてくれるよ！」

愛菜の質問にたじろいだ輝也が話を振る。いつも通りすぎるパターンに苦笑しながら、晃仁は目を伏せて話しだす。

「分からないからだよ。彼女が金持ちで本物の鎧や剣を持っているってことも考えられるし、本当に異世界の人なのかもしれないね？  
だけどそれはどちらも推測でしかなく確信できる情報じゃない。

だから今考えるべきなのは彼女の正体じゃなくて、彼女の言ったこととやるうとしてしていることだ」

「だろ？と言う晃仁に輝也がそういう事だよ！と返す。

全くもって一方的に晃仁がカバーしているんじゃないかと誰が見ても（愛菜も未来も）思うが、これで案外お互いにカバーしあっていると、お互いが納得している関係だ。

やるべき事を晃仁がまとめたら、後は輝也が前へと突き進む番だ。

「あの女、シユラクって言ってたっけ？ アイツが言っていたのは自分が月神？を信仰している国の次の女王様候補で、そのために未来のあほ毛が欲しいってことだったよな」

「それと、未来ちゃんの手座から三日三晩生命力を吸い取って、今後100年の礎にするとも言ってたね。あほ毛の切り株からは魔力とやらも出ていると」

自分たちの口からトンデモ用語がどんどん出てくる事に違和感を感じながらも、二人は少しワクワクしていた。

「持つてるモノが本物で、言ってる事がウソってことは十分あるだろうけど、万が一を考えたら本物扱いしたほうが良い。だとすれば……」

「なんとかしてアイツを追い返す方法を聞き出すしかないよな」  
危ないことは分かっている。

でもこれは昔から繰り返し返してきた、二人で大言壮語の妄想を言い合うのと何ら変わらない。

だから、お互いがどこに決着を持っていくのかもキチンと分かっている。

そろそろ眠くなってきたのだろう。時間はまだ九時を過ぎたあたりだったが、愛菜にとってはそろそろ電池切れの時間だ。眠そうな声で愛菜がつぶやく

「で、結局どうするか決まってるかいよね？」

「いや、決まってるよ」

晃仁の言葉に愛菜がガバツと起き上がる。

「髪飾りとやらであの女をおびき出して、上手いこと追いつ返すのさ」  
「それが簡単にできたら苦労しないよー」。

ソファアに再び倒れこんだ愛菜には、コレ以上は言わなくても良い  
だろう。もちろん未来にも。

だから輝也が言ったのはひと言だけだ。

「ミキ、お前のあほ毛、俺に預けてくれるか？」

「……うん、お兄ちゃんになら」

ミキはあほ毛を兄に手渡す。

「……よろしく、お願いします」

「返って来たらありがとうって言うてくれよなー」

あほ毛が無くてもやさしく頭を撫でる。

絶対に、絶対にここに俺の安息を取り戻してみせると誓いながら。

## 決闘、そして真実

時刻は朝の8時だ。

サイドカーに晃仁を乗せた輝也は、大学の敷地を経由して今は高等部の屋上にいる。

ポケットの中には髪飾りと化した愛しのあほ毛が、横には立てかけた竹刀が二本と、そして親友が居る。

だから目の前に居る女騎士が顔を真っ赤にして剣を抜き払っていても堂々と立っけていられた。

いや、本当は足が震えそうなのだが。

「貴様ら、昨日はよくも私を愚弄してくれたな!!」

その口調にもやはりどこが別世界じみた高貴さというか、小説の中の貴族っぽい傲慢さが滲みでていた。

だから晃仁は躊躇せずに、膝をついて頭を下げた。

「申し訳ありません、シユラクさん。愚弄することが目的であったわけではないのですが、そのように感じられた事には謝罪致します」「う、うむ」

どうも丁寧な対応に出られるとは思っていなかったらしく、いつでも駆け出せるような姿勢だったのにも関わらず、たたらを踏んで騎士は立ち止まっていた。

「ですが、我々もこれを早々譲るわけには参りません。そこで、決闘を致しませんか」

決闘、という言葉に彼女の整えられた眉がピクリと動く。

「貴女が勝つたらどうぞこれを持って行って下さい。ですが我々が勝つたら、どうかお引き頂きたい」

「……分かった。正々堂々たるその申し出、次期女王として断るわけにはいくまい。勝敗はどのようにして決める」

思った以上に事が順調に進んでいる事に驚きながらも、輝也は横においてあった竹刀の一本と袋を彼女に向かって投げて渡す。

「これは…？」

「この国に伝わる決闘用の模擬剣と勝敗を判断するためのメダルです」

袋を開けると中にはネックレス用のチェーンに、丸い金盤が取り付けられているものが入っていた。ちなみに金盤は100均で売ってた奴で、無駄に買って部屋でエアガンの的にしていたものだった。

「これでお互いの金盤を突くのです。どうでしょう、こちらも真剣で決闘して次期女王を傷つけるのはやぶさかではないですし」

丁寧な言葉の間に挟んだ挑発は、上手く王女に作用した。

「随分と軽い……見戯だが、受けよう」

こちらから先に挑発していたので文句は言えないのだが、見下した調子に輝也も多少イラツとする。

お前だって年齢は俺らとそう変わらないだろと思っただが、こちらの話を受けてくれるのであれば文句はない。

（というか、普通に付き合うのであればこの子も悪い子じゃないんだらうなー）

どちらかというと素直な性格のようだし、昨日の昼休みも人が居ないところを狙ったのだと考えれば、無意味に暴れるような人物ではないのだらう。

そんな風に思いながらも、輝也は竹刀袋から自分の竹刀を取り出すと二回三回と鋭く素振りをする。

5年間で仕込まれた面の素振りだ。振りぬく際に手首を内側に絞って急停止させる。

風を切る素振りを見て、シユラクも深呼吸して気持ちを切りかえているようだ。

どちらにせよ、負けられない。

「後は頼んだぞ、テル」

「任せろ」

開始の合図のため、二人の中央に晃仁が立ち、丁度剣道の開始位置と同じだけの距離を保って二人が対峙する。

癖で蹲踞くせ せんきょの姿勢を取ると、多少フラつきながらもシユラク見よう見まねで構えを取る。

礼は取らず、スツと輝也が立ち上がり中段に構えるのを見て、シユラクも立ち上がり、両手で持った竹刀を下に向けるように構え、剣先は相手ではなく自分の後ろを向いている。

(こりゃあ……剣道の脇構えか！)

剣道を知らないはずなのにその構えを取る事に驚きを感じながらも、ここに来て待ったはかけられない。

輝也の内心を悟りながらも、晃仁は数歩を後退して腕を交差させた。

「初めッ！」

先手を打ったのはシユラクだ。

一步を踏み込みながら下から振り上げられた剣を、輝也は上体の仰け反らせ(スウェー)で躲す。

半歩下がって体制を立て直せば相手は上段の構えに移っている。

(こりゃ、昼間のギリギリは”わざと”だったな……)

今もギリギリこちらのアゴを狙った一撃だった、と思う。であれば相当な精度だ。

(待ってたら、負ける！)

意を決して今度は輝也が前に踏み込む。

相手の喉元を狙う中段の構えで突進されるのは、彼女らの構えに無いのだろう、明らかに怯んだシユラクは下がりながら輝也の竹刀を叩き落すために上段から竹刀を振り下ろす。

ここが攻めどきだった。



振り降ろしてきた竹刀を弾くように高めで受ける。女子とは思えない衝撃で手が軽く痺れるが、そこはやはり女子だ。力任せに押し返して、

「コテエアッ！」

浮いた手元をはたく。

竹が肉を打つ音がする。骨などは折れていないだろうが、どうだろうかと相手の手元を見て、輝也は驚愕に目を見開く。

左手をかばうために、右手の甲で竹刀を受けていたのだ。

多少攻撃の勢いを殺しても、あの様子では二三日腫れてしまうだろう。

だが痛みに顔をしかめながらもシユラクは無傷の左手で竹刀を振る。輝也は慌てて一步をすり足で下がり竹刀で落ち着いて受けた。

剣道ならこれで一本だ。狙うのはあと一本。

落ち着いてシユラクの様子を観察する。

右手は竹刀に添えているだけだ。上段の構えを変えないのはそれしかないのか、痛みを隠すためなのか。

だがこの状態を続けるのは腕に負担がかかる。

だから、仕掛ける最後のチャンスは今だと決めた。

今までの”払う”動きや面の”振り”は囷だ。

本命はこの一点。

「うらあっ！」

相手の喉元に向けた中段を、大きく前に踏み出しながらそのまま相手の喉元に向ける。

下から迫ってくる竹刀の先はまっすぐ真正面と真ん中。ホップしてくる剣先から自然と上体が仰け反るところまで、全ては「見せた」結果だった。

全身を使って突き出した全速力の突きは、最後に一瞬だけ力を緩め、

「あっ……！」

胸の間に垂らされた金盤を弱く弾いた。

「勝負ありっ！」  
晃仁が高らかに宣言する。  
輝也の勝ちだった。

「な、負けた……？」

シユラクの頭の中を色々な思考が跳ねまわる。

女王の継承権、自分たちの国を支える力。それに失敗してしまった  
私と国の末路。

嫌だ。

一度目は強くそれだけを思った。

そして目尻を零れそうになる何かに気づいて更に思う。

嫌だ、泣きたくなんかないっ！

だけど今更それを止める事など出来なくて、シユラクは下を向いて  
しまう。

「おい、大丈夫か？」

全力で仕掛けてくれた男が掛けてくる声が煩わしい。

昨日一日見て回って知った。この世界では剣を持つものなど居ない。  
彼らの条件を飲んだのはこの世界の人間が弛んでいるからだと思っ  
たからだったのに。

だけど、負けて、どうしようもないなら。鎧の首元を緩め、ナイフ  
の刃を抜こうとしたところで、

「そこまですのよ」

後ろから唐突に声が聞こえてきた。

それは異世界では聞こえるはずの無い声。

こちらに駆け寄っていた少年が、顔を上げて警戒の色を強くする。

私を取り落としたこのシナイという竹で出来た武器を含めて二人が  
同じ構えをする。

喉元や目元を常に狙っていた、あの隙のない構えだ。

私はもう負けて決着がついたのだ。もう貴様らがその構えを取る必要はない。

だから、言うべきなのは前ではなく後ろにだ。

「何をしに来たんですの、お母様！母とはいえ、手助けは許されなはずですわよ！」

お母様、という言葉と「あ、素に戻ると男口調じゃないんだな」という気づきが同時だった。

「あらあら、負け犬が大きな口を叩くのね」

ぐっ、と息を詰めた娘の悔しそうな表情は見えてられない。

「貴方達も緊張しなくて良いですわ。本当の事を教えるついでに謝罪と依頼をしに来ましたの」

そう言うのと女性は恭しくドレスの裾をつまみ、お辞儀をした。

輝也があっけにとられて固まっている間に、晃仁が色々な事を考え、巡らせる。

「いい表情ですわね、そちらの方。ですが取り敢えずは武器を降ろして会話を致しませんか？それとも、今の二ホンの武士道は武器を持たぬ女性にも刃を向ける事を是と致すのかしら？」

「……どうやら、シユラクさんとは違ってこっちの事を知ってるみたいだな」

言い分を飲んでいいのか？という確認を含めた輝也の声に頷いて、自分から先に竹刀を降ろす。

「では、説明してもらえますか？　あなた達の事を」

全員が屋上に設置されたテーブルについて、シユラクの母がどこか

らかティーセットを取り出して全員分の飲み物を用意したところで、ようやくの自己紹介だった。

「申し遅れました、私がこのダ娘の母親であり、地球から見たら異世界の国であるムーンパレスの現女王。レイジア・ムーンヴァリエですわ」

丁寧なお辞儀につられて二人も礼を返してしまう。

釣られてちゃだめだなと思った輝也は女王に問うた。

「ダ娘ってなんですか？」

そうじゃないだろ、という晃仁の溜息に仕方ないだろ！とにらみを返す。一般的な高校生に大人の女性と落ち着いた会話を進めるテクニクなんてあるはずもない。

苦笑したレイジアは敵対的な空気など微塵も感じさせずに苦笑する。

「ダメ娘の略ですわ。真面目なのはいいんですけど、悪者に嘘を吹き込まれて信じてしまうようではダメダメですわ」

「初対面の男の子に対してわざわざ説明することじゃないでしょ！？っていうか嘘ってなによ！」

わめくシユラクは晃仁と輝也がスツと背筋を正したのを見て怯む。

つまり、ここが話しのキモなのだ。

「……自分から気付けないなんて、ほんとダ娘ねえ」

くー、とうめき声をあげながらシユラクは顔を赤くしてテーブルに沈む。

戦闘不能になった王女を無視して晃仁が今度は真剣に問う。

「私がシユラクさんから聞いていたのは、『女王になるために髪飾りが必要』である事と『髪飾りを持っていた人の生命力を吸い上げる』という事でした。それが、嘘であるか？」

「そのあたりについては嘘というより言い回しの問題ですわ。前半は真実ですの。ですが後半は大げさに言いすぎていますのよ。三日三晩髪が伸びなくなるだけですもの」

「はあ！？」

輝也が声を上げる。

「生命力って、そういう事!？」  
「そうですね。大体生命力を奪うのに台座を持つ人を傷つける剣など持たされる方がおかしいですね。台座が死んでしまつては生命力も何もないでしょうに」  
うぐうと声を上げたシユラクは小さくなるしか無い。

「一からお話しますと、私が病で寝込んでしまつたのが原因なので。あなた方は今高校三年生ですね。ああ、二年生ですね、随分と大人びて立派に見えたわ。私たちの国で女王を就任するのは大体が20〜25歳くらいの間でダ娘が女王に就任するにしても大分早いのですが、私の目の届かぬ内にダ娘は私を失脚させたい大臣たちに騙されて嘘の情報を与えられたのですわ。」

この試験では原則的に、相手を傷つけてはいけません。というか何者かを傷つけて髪飾りを奪う事は即試験失格で認められず、女王就任の切っ掛けを失う真正銘の失脚につながります。とはいえ、試験の実際の取り決めの説明は私の時も直前でしたし、ダ娘が知らなくても仕方ないのですけれど……剣は本来、所持すら許されておられないのに、多少は知っておいてほしかったところですね。というのが私たちの言い訳です。髪飾りについては後ほど正式に依頼したいのですが、ここまでではよろしくて？」

簡潔にまとめられたレイジア女王の話は大変にわかりやすく、晃仁だけではなく輝也も納得と理解を得られていた。

「つまり、本来は全く危険なことじゃねえってことだよな？」

「みただね。誰かを傷つけさせることで、シユラクさんの失脚とか国家転覆とかを狙つたわけだ」

「……なんとかラッキーで無事だけど、ゾツとしねえ話だな」

「全くだよ。とりあえずレイジア……女王？」

「あら、レイジアさんで良いですね。私と貴方達は一人として対等にテーブルに付いているだけです。王女以外が試験に手を出す事は認められておりませんもの」

にこやかに笑うレイジアに釣られて晃仁も抗えずに「レイジアさん」と呼んだ。

「本当の試験が進んだらどうなるのか、教えて頂けますか？」

もちろんだと頷くレイジアは紅茶を一口含んでゆっくりと下ろす。

タイミングが分かっていたいなかった二人も合わせて紅茶を頂いて、息を吐く。

「まず、髪飾りと呼んでいる髪は用が済めば元に戻せますわ。この世界に住んでいる者と私たちの世界に住んでいる者は体に蓄えている魔力が段違いですので、それをこちらの世界に頂くための中継路を開くために必要なだけです。三日経てば中継路は髪飾りの所持者を通じて、世界とつながるパイプラインとなりますので、そこからは所持者の魔力を頂くこともなくなりますの」

「じゃあ本当に、未来に悪い事は起きないんだな、ですね？」

「悪いことも、もちろん起きませんわ。むしろこちらの世界で純化された魔力と触れ合えますので、肌もキレイになって体の調子も良くなってモテまくりになれますの」

通販の宣伝かよ、と輝也は苦笑する。つまり冗談を言える程度の事なのだろう。

それも”嘘”かもしれないよな、という思いはあるものの、二人はこの人の事を信じてても良いと判断した。

「いくつか聞きたいんですけど……シユラクさんは三日三晩魔力を吸い上げて、100年の礎にすると仰っていたんですが、女王は大体20〜30年周期で代わるんですよね？」

「補給路は一つではありませんの、と言えばよろしくて？」

「ああ、なるほど。大丈夫です」

俺は大丈夫じゃないんだが、と視線で訴えかける輝也……とシユラクに晃仁が説明する。

「つまり、一回開いたら100年は閉じない蛇口なんだよ。でも何が起こるか分からないよな。例えばこっち側のパイプの入り口になっっている人が何歳まで生きるか分からないし、途中の水道管がなん

らかの事故で壊れてしまう事も考えられる。だからおそらく常に5つか6つくらいの台座があるんじゃないかな？」

「どうですか、と聞くとレイジアは満点ですわ、と笑って返した。娘の頭を後ろからひっぱたきながら。」

「というわけで、三日間は不精な髪型になってしまいますけれど、理由はご納得頂けます？」

頷いた輝也が口を開きかけると、レイジアがこちらの口を塞ぐように立てた人差し指を当てた。

日本のコミュニケーションが分かっているとすれば、それは喋るなというサインだった。

どうして？と視線をレイジアに投げた輝也だったが、女王の視線が王女に向かった先を見て察する。

「二人とも察しの良い少年たちで、嬉しいですわ。私は説明しただけで、貴方達にお願いなどしていないものね？」

ようやく母の迂遠な気遣いを理解したシユラクは、緊張と羞恥に顔を真っ赤にしながら頭を下げた。

「ムーンパレスの王女として、頼む。その髪飾りを私に、ムーンパレスに貸してはもらえないだろうか」

未来には三日ぐらい我慢してもらおう。

幸い月曜日は祝日だから、問題も無い。

「大事にしてくれよな、俺の大事なあほ毛なんだぜ」

「……まったく、そればかりなのね。あなたの妹のじゃありませんでしたの？」

ぎこちなく、固いものだったが、微笑を浮かべる王女にそれは手渡された。

## 帰ってきたあほ毛達

女王の話に嘘は無かった。

結論からまとめるとそういう事になる。

「何でそーゆう事をミキちゃんが居ないトコで決めちゃうの！信じられない！」

土曜日の昼前に家に戻って、ミキの所に遊びに来ていた愛菜は二人の説明を聞くと怒り狂った。

未来に向かつて土下座することで二人は愛菜の怒りを鎮めようとしたのだが効果も無く、止む無く頭を下げたばかりの未来に頼ることになってしまった。

「大丈夫、お兄ちゃんに任せたのは、私だから。だから、何があっても、そこは私の責任なの」

よくできた妹はだまって頭をつきだしてきたので、撫でてやることにした。

むくれたまま怒る先をなくしてプンスカしている幼馴染の事は知らん。

三日の間に未来の調子が悪くなることは無かった。というかむしろ調子が良かった。

低血圧でなかなか起きられない妹が家族の誰よりも早起きして朝食を作っていたときは、驚いた母親にフライパンで起こされてしまったぐらいだ。いい迷惑である。

「なんかね、時々あたまのてっぺんがムズつとする時があるの」

と言っていたが、輝也にはあまりよく理解できず、頭を撫でてごまかしていた。



そして妹のあほ毛を返してもらえるその日が来た。

が、結局朝の間にシユラクが現れる事は無かった。

「返しに来るって言うてもいつ来るのか聞いてなかったよね……」  
晃仁がらしくない失敗に珍しく落ち込んでいて、今日は朝から愛菜に慰められていた。

「んー、アキくんがテルくんみたいなポカやらかすなんて珍しいよねー」

という愛菜の言葉が一番でクリーンヒットしているのは俺も微妙な心境なので指摘しない。

まさしく愛菜の言うとおりで、こういう細かいところをすっ飛ばしてしまう俺のフォロワーは晃仁の仕事なのだが、そういう言い方は俺も傷ついているんだぞ、と言いたい。

登校の時に頭の上が奇妙なままだった未来は帽子を被ろうとしていたが、その手のファッションが校則で禁止されているので取り上げざるを得なかった。

午前中を落ち込んで過ごしただろうし、今日も屋上に連れてって気分転換でもさせようかと考えていた所に、教室のドアが空いた。

「清澄の妹です。兄は居ますか？」

「おっ、ミキ」

顔を上げた俺は妹の右隣にいた銀髪の女の子に気づいて……。

「あ、あほ毛の美少女……だとっ……？」

「き、きさまっ！言うに事欠いてそれかっ!？」

妹を追い越してズカズカと歩み寄り、襟を締め上げる女の子に、クラス中の視線が集まった。

あのあほ毛にしか興味のない清澄に、まさか外人の彼女が!?!とクラスは一瞬ざわついたが、その少女にもまごう事無きあほ毛がフワついていたので一瞬で静まった。

「なんであんなストライクゾーンの狭い趣味に適合する美少女が集まるんだよ」「今度は巨乳棒で御座るか」「肅清」「愛菜ちゃん……かわいそうな子……」「ライバルが増えるなんて、大変よねー」などとクラス中が好き勝手なことを言っているが、とりあえず無視だ。

「えーっと、シユラクさん、で合ってる？」

晃仁が尋ねると怒ったまま少女が顔を縦に振った。

「当たり前だ！ま、まさかもう忘れちゃったのか！？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……」

その剣幕にたじろいだ晃仁は輝也に視線を戻す。

「あー、うん。この前までは兜を被ってただろ。その銀の髪があまりにもキレイだったからちよっと見違えてさ」

「そ、そうか？」

頬を怒りとは違う意味合いで赤く染めたシユラクの上であほ毛がみよんみよんと揺れる。

「うむ。そんなに可愛くて素晴らしいあほ毛があるなら最初からあんな争いをするには無かった」

自信満々に断言した輝也に怒りの限界が超え、逆に呆れて物も言えなくなつたシユラクは近くの席に腰を落とした。

後ろに歩み寄つた未来が彼女の肩を揉む。

「言つた通りだね。お兄ちゃんならこうなると思つてた」

「まさか未来の言う通りになるなんて思わないだろう……髪型というか、寝ぐせみたいなものだぞ、コレは」

まあまあ、とシユラクの頭を未来が撫でる。

その彼女の頭上には、既にあほ毛が戻っていた。

「お兄ちゃん。シユリーはちゃんと返してくれたよ。あと、うちのクラスに転入してきたの」

異世界の人間が転入というセンサーシヨナルな事実にも3人は驚くしか無い。

特に目の前でいきなり魔法で物を取り出したりしていた母を見てい

た輝也と晃仁は特に。

シユラクは慌てて説明する。

「ど、どうやら母様もこの試験の時にこの世界に来ていたらしくてだな、女王就任までの間はこちらに転入していたというのだ。そ、その事例に倣<sup>なま</sup>って私もここに世話になることにしたのだ！」

「うん」とか「そう」とかしか返せない男二人を放っておいて、愛菜はシユラクに抱きついた。

「うんうん、よろしくね！。シユリーちゃんって愛称？私もそう呼んで良い？」

「愛菜は未来の姉のようなものだ聞いた。無論問題無い」

愛菜に抱擁されているシユラクを置いて、未来は輝也の前に立った。椅子に座ったまま妹を見上げる。

「お兄ちゃん、約束。ちゃんと戻して、戻ってきてくれて、ありがとう」

頭の上のあほ毛を揺らしながら微笑む妹は最高に可愛かった。

「おう、どういたしまして、だな」

妹の頭を撫でて手の中で跳ねる感触を楽しみながら、はやく弁当でも食おうぜ、と笑う。

一つ増えて、今日も変わらず俺のあほ毛ライフは絶好調なのだ。

## 帰ってきたあほ毛達（後書き）

というわけで、第一章「妹と異世界の王女様」編は終了です。  
あほ毛はまだまだ残っていますし、これからも増えていきます。

間があくとは思いますが、第二章以降も読んで頂けると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5929y/>

---

俺の のあほ毛が !!

2011年11月21日20時48分発行